

マレーシアで開催された世界教会協議会会議

綱島(三宅)郁子

1. はじめに

2004年7月28日から8月6日まで、マレーシアの首都クアラルンプールで、世界教会協議会(World Council of Churches: WCC)¹の信仰職制委員会(Faith and Order)²本会議が開催された。世界各国から約120名の教会指導者や神学者達が都心のフェデラル・ホテルに集合したという。これは、プロテスタント各教派(バプテスト・ルーテル・メソヂスト・改革派など)及び聖公会や東方正教会を中心とした世界最大の教会組織の指導者層の会合である。WCCはスイスのジュネーブに行政本部を置く。ローマ・カトリック教会はメンバーに含まれていないが、正式代表を派遣し、WCCとは毎年密接な会合を持つ。2004年1月時点で、約120カ国の342教会が会員であり4億人の信徒を含むという³。しかし現

在は、その大多数が南の地域に存する。2004年1月以来、現在の総幹事長は、ケニアのメソヂスト教会員 Rev. Dr. Samuel Kobia である。

本会議のテーマは、聖書のロマ書15章7節から引用された「キリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れ合いなさい、神の栄光のために」であり、可視的な教会一致を志向するものであるが、これは他方、不安定な世相を反映した戒めとも解せよう。

会議中の研究題目は、教会論(Ecclesiology)、洗礼(Baptism)、神学的人類学(Theological Anthropology)、民族および国民的アイデンティティと協調の模索(Ethnic Identity, National Identity and the Search for Unity)、エキュメニカルな聖書解釈学(Ecumenical Hermeneutics)、平和に関する神学的省察(Theological Reflection on Peace)の6つである⁴。

会合の詳細は、キリスト教各教派の協同一致を目指す神学的内容であるため、ここでは割愛する。

2. マレーシアが選ばれたことの意味

WCCがいつ頃、どのような理由で開催地を決定したのかは定かではない。

2003年11月11日付のインターネット版ブルナマ通信では⁵、アブドゥラ氏が第5代目マレー

¹ WCCの沿革を略述する。1920年代頃から、キリスト教の教派間の協力の動きがあり、1937年には教会指導者層がWCC設立に合意していたが、第二次世界大戦のため、実現されなかった。1948年8月にオランダのアムステルダムで正式に始まった。初期は、主にヨーロッパと北米のプロテスタント147教会が中心であった。現在は、太平洋・北米・中東・南米・ヨーロッパ・カリブ海・アジア・アフリカ地域に各事務局を置いて、キリスト教の可視的な協同を目指して運動がなされている。アジアでは香港にアジアキリスト教協議会事務局が置かれている。日本はUnited Church of Christ in Japanとして加盟登録している。2001年から2010年までは「暴力の克服」という文脈で、和解と平和のテーマも含むという。

² 第1回は1927年スイスのローザンヌで開かれた。前回は1996年にタンザニアで会合が持たれた。

³ プロテスタントの中でも、福音派、メガチャーチ、ペンテコステ派、独立教会(一部は参加)などは含まれな

い。

⁴ *Berita CCM*(2004年4月-6月号) p.27.

⁵ *Bernamea.com* の記事 'World Council Of

シア首相に就任したことに対して、当時の WCC 総幹事長 Rev. Dr. Konrad Raiser が 2003 年 11 月 10 日付ジュネーブ発信のメールで歓迎のメッセージを送っていたことが報じられた。初めてこの記事を読んだ時には、WCC はどの国に対しても政権交替の際にはメッセージを送る慣例があるのだろうか、と不思議に思った。開催地がマレーシアになったニュースを知ったとき、事の真相詳細は定かではないものの、(もしかしたらあの歓迎メッセージはこの伏線だったのかもしれない)と直感した。一面、国際外交とはそういうものなのだろう。

いかなる背景にせよ、本会合についてまず留意すべきは、WCC の最高会議である総会 (Assembly)⁶ではなく、あくまでも、委員会本会議 (Plenary commission meeting) が開かれたという点である。また、WCC は 1979 年に諸宗教間対話の指針を設定しているが⁷、今回の会合は、中心課題としてイスラームとキリスト教の対話を目指したものではない。ムスリムが多数派を占める

Churches Congratulates Abdullah.' 当時の WCC 総幹事長は、2000 年 11 月にマレーシアを公式訪問し、マハティール首相に面会していたという。従って、WAWASAN2020 の実現に向けてもメールを送る内容であった。なお、2003 年 11 月 24 日から 29 日まで、クアラルンプールのカトリック大司教管区司牧センターにおいて、WCC のアジア地域会合が催され、29 名の参加者が集った経緯がある (*Berita CCM* (2003 年 10 月-12 月号) pp.5-7)。

⁶ 7 年毎に行われ、最近では第 8 回総会が 1998 年 12 月にジンバブエのハラレで開催された。次回総会は、ブラジルのポルトアレグレで 2006 年に開かれる予定である (*Berita CCM* (2004 年 4 月-6 月号) p.27)。

⁷ WCC は 1991 年からムスリム・クリスチャンの対話にイニシアティブをとり、最近の会合は、2000 年 11 月にオランダの Amersfoort で行われている。

マレーシアで、初めて WCC の会議が持てたことに、国内メディアでも賞賛の声が上がっているものの、仔細に眺めれば、開催が可能になった理由は、会合では特にマレーシアの国内問題や宗教問題が正面から取り上げられることがなかったからでもある。つまり、内容ではなく、場所をクアラルンプールが提供したという点こそが重要なのである。対外的には、政府当局にとって「平和で繁栄し、キリスト教にも寛大なムスリム国家マレーシア」という評価ポイントを稼ぐことができ、今日の世界一般に向けては、マレーシアは「憎しみと不信の論理に対する力強い意思表示」の機会を外交的に得たとも解することができる。マレーシアのキリスト教側にとっても、ホストとして、地元教会が開催式や終幕などの任務にあたり、国立モスクを含め、2、3 の地元教会見学ツアーのプログラムを組み込むことで、マイノリティとしての国内での位置づけと存在意義をアピールできるまたとないうチャンスであった。

実はマレーシアにおいて、国際的なキリスト教の催しが持たれたケースは過去にも皆無だったわけではない。記憶が定かではないが、何年前にクアラルンプールのスタジアムで開かれた福音派の伝道集会などがその一例である。

しかしこれには、一定の社会文脈パターンがある。マハティール前首相のヴァチカン訪問の際でも触れたように、概して二重基準が採用されているといえよう。今回もそうであったが、開催地にムスリムが過半数を占めるマレーシアが選択される度に、キリスト教側が招待した首相あるいはトップレベルのマレー人指導者が、普段の国内向けマレー語スピーチに比して、遙かに視野広く格調高い内容の英語スピーチを冒頭に行く。非イスラーム諸宗教の存在を容認し、多宗教が安寧

と調和のうちに共存している先進的ムスリム国家マレーシアをアピールし、世界情勢を踏まえてイスラームとキリスト教の共通項および社会的状況分析を含む基調講演である。それを受けて、地元のクリスチャン達は、会合の開催が許されたことに対して恭しく感謝し、双方の体面を保つ、といった条件が必須なのである。キリスト教側は、その度に、国内におけるムスリムとクリスチャンとの関係がよりよいものになり、さらに信教の自由が促進されることを期待する。確かに、開催中、事故や騒動が発生することもなく、無事、会を閉じることができるという事実は、マレーシア社会の一定の安定を証明する。ただ、国際レベルであっても、キリスト教関連の各種会合に一般のムスリムが積極的に参加することはまずありえないため、今後の動向変化は、よく見積もっても希求のレベルにとどまり、急激な変化は見込めないだろう。また、マレー人優遇をはじめとする各種のムスリム優位の政策がとられ、非ムスリムには二級市民扱いされているという意識が根強く、一皮めくってみれば常にコミュニティとの間で緊張関係あるいは分極状況を内包する。

これをどのように解釈するかは議論の分かれるところである。現今の多民族、多宗教社会マレーシアは、植民地支配によって不当に背負われたもの、と考えるならば、そのような二重基準を承知し、それこそがイスラームの栄光復権のためにムスリム国家のあり方として本来望ましいと支持する考え方、あるいは、マイノリティとはそもそもそういう不利益を被るものなのだ、と容認ないしは譲歩する(または譲歩を迫る)立場もあるだろう。一方で、宗教は自由意志で選ぶものであるという個人の権利を促進し、お飾りのようなムスリム指導者の啓蒙的スピーチで終わらせるのではなく、

一般のムスリムからも自由に参加するところまで幅を広げるべきだ、そうでなければ真の相互理解には結びつかず、対話すら成り立たない、という見方もあるだろう。

結局のところ、イスラーム圏と非イスラーム圏における多宗教共存のあり方の根本的差違を現状においてどこまで認めるか、ないしは将来的に一方が他方の変革を期していくのか、が鍵になるのではないだろうかと思われる。ムスリムが多数派を占め、政治的支配権を握るイスラーム圏では、伝統的な考え方によれば、イスラーム法が許可する範囲内での非イスラーム諸宗教の共存と接触が認められる。その際、非イスラーム諸宗教は、イスラームと対等の立場にあるのではなく、常に劣位に置かれ、ムスリムの気に障るようなことを極力避けることが要求される。その反面、いわゆる世俗社会を含む非イスラーム圏では、先進的であればあるほど、マイノリティの立場や個人の自由選択をできる限り認め、異なる立場であろうと対等に相互交流するよう配慮する方策がとられていることが多い。

マレーシアの場合は、マイノリティとはいえ、非ムスリムの比率も40%以上とかなり大きく、それなりの底力ないしは活力も有しているため、問題は微妙なところである。世界中のイスラーム諸国にとっては、マレーシアの発展と社会的安定は一種のモデルであり輝ける星なのだそうである。ただその場合、非ムスリム側の貢献とある面での忍従、恵まれた生態的地理的条件、英国植民地支配に秩序立てられた社会方式を大枠において引き継いだマレー人指導者層の選択、外部からアラビア語のみならず、英語や華語ないしはインド系諸語からも情報が入ってくるという言語的多样性や拮抗する諸価値観の微妙なバランス、

などの社会状況を見捨てるわけにはいかないのではないだろうか。

3. マレーシア教会協議会幹事長のインタビュー内容

(1) 多宗教社会マレーシアでの諸宗教共同体の関係について

マレーシア教会協議会幹事長 Rev. Dr. Hermen Shastri は、会合開催直前の 2004 年 7 月 26 日になされた WCC とのインタビューで、次のように発言している⁸。「私達と、シク教や仏教やヒンドゥ教など非イスラーム諸宗教との関係は非常に良好です。しかしイスラームとの関係は、相手のムスリムによります。対話に開かれた態度をとる穏健なムスリム・グループもありますが、非ムスリムにはコメントする権利がないと考えて対話を拒否するグループもあります。私達は、ムスリムとの関わりにおいて、対立的なやり方は採用しません」。

この応答から、マレーシアが数々の宗教上の問題を内包しつつも、ある程度の調和と安定を保っている秘訣として、多数派のムスリムすなわちマレー人に対して対抗的になるのではなく、常に接点を保ちつつ話し合いを優先させて問題解決に導く、キリスト教側の一種したたかな方略がうかがえる。特に、内閣のメンバーにサバ州・サラワク州出身のプミプトラ・クリスチャンの政治家が含まれている場合、その筋を通して、マレー人の政治指導者に各種交渉を持ちかけたり、キリスト教的価値観を紹介したりするという。ただ、なぜ

⁸ 'Being Christians in a Muslim-majority country-Interview with Hermen Shastri.'

他の諸宗教とは良好な関係が保てるのかについて、キリスト教も含めた非イスラーム諸宗教が非マレー人のマイノリティ宗教であり、マレー人優遇政策が採用されているマレーシア社会で、イスラーム以外の諸宗教は相互の社会的利害が一致しやすいという特徴を説明することは控えられた。

(2) 映画『パッション』のマレーシア国内上映の問題について

しかし同時に、Rev. Dr. Hermen Shastri は、マレーシア国内で宗教上の問題が皆無ではない証拠をタイミング良くとらえて、メル・ギブソン制作映画『パッション』⁹の上映制限に対する批判を、会合期間中、公に表明した¹⁰。これは、Rev. Dr. Hermen Shastri 一個人の意見表明というわけでもなく、カトリックも含めたキリスト教側の大多数の見解を代表したのものである。師は、マレーシアの映画検閲委員会の対応について「この映画がクリスチャンだけに限られるのは不服である」と述べた。「イエスを一預言者とするムスリムにとって、この映画は不快なのではないか」という意見に対しては「確かに、イスラームとキリスト教では教義上に違いがある。しかし、ある宗教共同体が一つの解釈に合意しないからといって、他のヒンドゥ教徒や仏教徒に対しても自由に見せてはならないことを意味しない。この処遇は、諸宗教間理解に反する」と反論した。この映画上映に関しては、数ヶ月前から議論があり、当初マレーシア

⁹ "The passion of the Christ." 日本では 2004 年 5 月 1 日に上映が始まった。

¹⁰ 公開プレス会議の席上での発言 (Protest as Mel Gibson's film shown only to Christians.' 2004 年 7 月 29 日付 WCC News Release)。

では、ムスリム保護のために一切上映を禁止していたのだが、キリスト教側の強い抗議によって、結局のところ、マレーシア福音派キリスト教交流会 (National Evangelical Christian Fellowship: NECF) が切符販売の窓口になるという条件で、クリスチャンのみに限り、限られた映画館でのみ鑑賞が許可されることになった。切符枚数は、20 万人以上を見積もっているとのことである。

4. アブドゥラ首相の演説

さて、今回注目されたのは、8月3日に行われたアブドゥラ首相の演説であった¹¹。

昨年、イスラーム諸国機構(OIC)でリーダーシップをとった現首相は、ペナンの有名なイスラーム家系の出身で、マラヤ大学でイスラーム学を専攻している。実は、中等教育課程で一時期メソヂスト男子校に通った経緯があり、Datin Paduka Seri Endon Mahmood 夫人もペラ州カンパールのメソヂスト中等学校の出身者である。また、首相就任時、今も'Cikgu'と親しく呼ぶ恩師が、実は退職後、教会奉仕活動に専念している華人男性のクリスチャンであったことがスター紙で紹介されたことも記憶に新しい。もっとも、この世代の上流家庭あるいは中上層のマレー人には、都市部のミッションスクールで英語教育を受け、現在、各分野の指導者となっている事例が珍しくない¹²。つまり、感受性豊かな人格形成期

¹¹ 'Malaysian prime minister calls for concerted effort to initiate inter-faith dialogue' (2004年8月3日付 *WCC News Release*) .

¹² 例えば、現副首相の Datuk Seri Najib Tun Razak 氏はカトリックの聖ヨハネ・インスティテュートの卒業生で、元クアラランプール市長だった Tan Seri Kamaruzzam Shariff 氏も聖ザビエル学校の出身

に、多様な背景を包含する環境で過ごしたということが、マレー・ムスリムとしての生き方に、プラスであれマイナスであれ、何がしかの影響を与えないはずがないと想像されるのである。

アブドゥラ首相の率直さと穏健さは、筆者も好ましい感を抱く点である。国内向け一般メディアなどでは、マレーシアはモデルであり、多宗教が平和と調和のうちに共存していると繰り返し喧伝されるのであるが、首相は「国内に潜在的な宗教間の緊張や不満がないわけではない」と公に認めた。また、乳ガンを患う首相夫人をいたわるキリスト教側からの祈りの言葉に感じ入ったのか涙を流す一場面もあった(困窮を極める世界情勢を思い、つい涙があふれたのだ、と後の記者会見では弁明していたが、真偽のほどは不明である)。

ムスリム側を代弁して「多くのムスリムにとって、テロへの戦争はイスラームに対する戦争であると感ぜられる」と表明した後、クルアーンと聖書の両方から共通項を引用しつつ、「イスラームとキリスト教の間に、数年前よりも信頼や良識が失われている」ことを指摘し「宗教間の対話については、相互の信教の自由を尊重し、オープンに話し合う必要がある」と述べた。しかしながら「中庸を促進することはたやすくはない。多くの人々は、自分

者である。また、前首相夫人の Tun Dr. Siti Hasmah bt. Mohd Ali 氏はメソヂスト女子校とアングリカンの聖マリア学校、国際通商産業省大臣の Dato' Seri Datin Paduka Rafidah Aziz 氏は、カトリックのブキット・ナナス修道院学校で学んでいる。このような事柄は、公表された経歴や学校記念祭などの新聞記事からわかるが、地元の 40 代以上のクリスチャン達と雑談していると、ごく自然に出てくる話題でもある。元クラスメートだったり、同窓生名簿あるいは教会ルートを通じて、経験的に熟知しているからだろう。

の信仰に全幅の信頼を寄せているからである。そういう人々にとって、他者との妥協はない」とも述べた。結びとして「不一致のままで成し遂げていないことがこれほど多くある間は、我々は憐れみ深い神の前に立つことができない」と語った点が筆者にとっては印象的であった。

アブドゥラ首相の出席とスピーチに対する感謝の念をこめて、本委員会の議長 Rev. Dr. David Yemba からアラビア語訳の聖書が献上された。

5. 国内メディアなどの反応

首相のスピーチは、当日のオンライン版あるいは翌日の印刷版の英語およびマレー語メディアで大きく報じられた。一方、福音派組織 NECF は、これまでに筆者の知る限り、この会合開催について特に言及していないようである。また、PAS 党の“*Harakahdaily*”には 2004 年 8 月 4 日付で、イドゥリス・オマール師の意見がクルアーンの引用付で掲載されていた¹³。要約すれば「WCC はキリスト教の会合であり、ムスリムの首相が出席したのは適切ではない。あれはキリスト教側が自分達の宗教を広めようとして外国から来たのだ。イスラーム国のムスリム首相が出席するなんて、あたかもイスラームが他の宗教と同じであることを認めたかのようである。また、アラビア語の聖書を受け取るのはふさわしくない」ということのようにである。

ところでカトリック冊子の“*Catholic Asian News*”は、「福音化」の解釈をめぐる教義上の相違がキリスト教内に存在することを Rev. Dr. Hermen Shastri が認めた、と紹介した。具体的

¹³ ‘Tidak wajar Abdullah rasmi Perhimpunan Majlis Gereja Sedunia.’

には、改宗活動を福音化と同一視するキリスト教の教派が存在し、そのことが非クリスチャンの間で不信と不安の原因となっていることを指す。これに関してカトリックの Murphy Pakiam 大司教も同意し、「福音化の名において、不調和を招くような狭く原理主義的な福音解釈をする極端なグループがキリスト教内にある」と述べた。しかしこの件について参加者が公に話し合ったという記録の形跡はない、とも付け加えている¹⁴。

しかし国内のカトリック側の声としては、次のような批判もあった。アブドゥラ首相がこのような場で「クリスチャンの友人と宗教間対話を始めたいと願っているムスリムとしてここに来ている」といくら述べたところで、実際には第一代首相の Tunku Abdul Rahman 時代から昨年の法曹界主導の試みに至るまで、宗教間対話の組織結成はとうとうまく機能していない。たいていは、ムスリム側の不参加によって頓挫してしまうのである。これをどのように考えればよいのだろうか。さらに具体的には、最近の事例として、夫と幼い子ども二人がヒンドゥ教徒の妻の同意なしにイスラーム改宗してしまったケース、1998 年にイスラームを放棄した 4 人の訴えが連邦裁判所で却下されたケースを挙げ、いくら首相が涙つきでスピーチをしても、それはレトリックに過ぎないのではないかと主張していた¹⁵。

6. その他

委員会の総括としての閉幕声明は、可視的な

¹⁴ ‘Just Another Talk-Fest?... or will there be follow-up action.’ (*Catholic Asian News* (2004 年 9 月号) p. 24).

¹⁵ ‘Still Dialoguing Over Inter-Religious Dialogue?’ (*Ibid.* pp.25-6).

教会一致を求めて努力し続けることを確認し、未解決の諸課題の存在を認めつつも、教会が相互理解の点で前進できる兆しがあり、「希望の時」の到来を感じ始めているというメッセージであった。その他に興味深く思われた二点を以下に記す。

(1)外国人参加者の疑問「ムスリム国でクリスチャンであるということは、何を意味するのか？」

今回のホストであるマレーシア人クリスチャンは、勿論、もてなし上手なこの国の人々の常として、外国からのお客に対しては、初対面であることもあり、国内のエスニック問題や政策上の不利益をあえて述べ立て、同情や理解を求めるようなやり方をとらなかった。むしろ、「私達はこの国で礼拝の自由が守られることを感謝している」「ムスリムには伝道できないが、残りの30%以上の非ムスリムにはキリスト教を伝えることができるから、それはいいことだ」と、できる限りプラス面を強調して、遠方の客人に好印象を抱いてもらうよう精一杯のサービスをしていた模様だった。いつもの、いやつい最近もあった、宗教コミュニティ間の摩擦や見解の対立から来る遺憾表明や抗議声明はどことやら、である。しかし、「非ムスリムの礼拝の自由」は憲法で保障されていることであり、ムスリムの権限を侵害したり感情を害したりしない限り、ムスリムは一般的に非ムスリムの礼拝儀式には干渉しないことになっているので、付与されている権利に対してあえて「感謝」と表出しているとれなくもない。

実際、WCCのメディア関係オフィサーである Juan Michel 氏は、今回の会合にまつわるエッ

セイで次のように述べている¹⁶。「マレーシアのクリスチャン達の状況は次のように反映されている。すなわち、信仰の表明をする自由があることに対しては頻繁に感謝する。そして、教会が苦闘する問題の大半にイスラームが常に関与するという事実に対しては、ほんの時折にのみ、思い切って不満を表出するだけだ」¹⁷。さらに氏は、アブドゥラ首相がWCC会合にひと時出席したことが国家的大見出しになったこと、自国の多文化主義と多様性のユニークさを自ら世界の一例と述べたことを引き合いに、政治家や宗教指導者や新聞が繰り返し毎日「エスニック間や宗教間の調和」を述べ立てるしつこさに疑問を呈している¹⁸。これは筆者も十数年前から常々思っていたところで、表面的な目まぐるしい変転はともかく、根本的な事態はあまり好転しているように見えないのに、ほんの少しのことだけでずいぶん大仰に感謝を表明しているように感じたものだ。個人レベルで話を聞けば水面下で不満や非難が積もっていることがわかるものの、政府と交渉する指導者層レベルになると、そんなことはおくびにも出さず、あくまでにこやかにしかも驚くほどの忍耐強さでもって、マレー人政治家と交渉する。しかし、たとえ論理的には理にかなっていても、またいくら正当性がこちらにあると思っても、少しでも相手の気に

¹⁶ 'Christians in Sandakan's land'(2004年8月5日付 *WCC Press Feature*)。但し、氏の見解は本委員会の公の声明として書かれたものではない。

¹⁷ 同時に氏は、エスニック関係の複雑さや1971年から続いているマレー人優遇政策にも言及し、このようなクリスチャン達の態度について一定の理解を示している。

¹⁸ 英語新聞のある編集者が氏に語ったところによれば「それはその反対がひどく恐ろしいからさ」という('Christians in Sandakan's land.'(2004年8月5日付 *WCC Press Feature*))。

入らない言動をとろうものなら、まずは前進の芽が
つづれる可能性が大、となれば、そこはぐっと我慢して大人にならなければならないのだ。しかも、真に調和がとれた社会なら、あえて繰り返し
自画自賛する必要はない。Juan Michel 氏はこのあたりを実にうまく描写している。

(2)二人のマレーシア人女性の話

もう一つは、カトリックとムスリムを代表してマレーシア人女性二人が意見表明したことだった¹⁹。カトリック側は、アメリカのテンプル大学からイスラーム研究の博士号を授与され、今はマラヤ大学アジアヨーロッパ研究所の上級リサーチフェローを務める Dr. Patricia A. Martinez である。彼女は言う、「マレーシアの非ムスリムは許容され順応されている (“tolerated” and “accommodated”)。そしてこの言葉によって、非ムスリムのマイノリティを部外者や二級市民に引き下げている」「ムスリムと非ムスリムは日々出会っているのに、真の対話がほとんどない」「ムスリムはムスリムであることに自信と開かれた心を持つべきだ」。一方、ムスリム代表としては、進歩的なプロフェッショナル女性グループとして知られる“Sisters in Islam”のオフィサー Nora Murat 氏が、「女性問題」および「表現の自由」「信教の自由」「人権」の拡大を唱え、「安全な」領域での対話を超えた動きを訴えた。また「センシティブ問題なんて存在しない。人々を黙らせるためにセンシティブということがセンシティブなのだ」とも述べた²⁰。

¹⁹ ‘Living in a world of difference.’(2004年8月6日付 *WCC Press Feature*)。筆者の Mark Woods 氏は、イギリスのバプテスト聖職者兼 “*Baptist Times*” のニュース編集者である。

²⁰ これに対する神学者からの応答は次のようなもの

7. 今後の展望

会合開催中の8月1日、イラクのバグダッドとモスにあるキリスト教会で爆破事件が発生した。これに対し、マレーシアに滞在中だった WCC 総幹事や各教会主教が、翌日速やかに非難と懸念を表明すると同時に、クリスチャンとムスリムの連帯及び平和実現への協力を促したことは、中東地域に対する発信の意味のみならず、一部で教会破壊や抑圧の事例が現に散見されるマレーシア国内に向けてのインパクトとしても、大変重要であったと思われる。

余談であるが、2004年8月23日付で日本からマレーシア教会協議会事務所宛に住所変更の手紙を送った際、「アブドゥラ首相の演説が大変印象的であったことを報道で知り、クアラルンプールで開催されたこの WCC 会合が成功したことをうれしく思う」と書き添えたところ、普段は多忙を極めているため、あまり返信のない幹事長の Rev. Dr. Hermen Shastri から 2004年9月2日付署名入りでお礼状が届いた。「友よ」と呼びかけ、感謝を表わす言葉が何度も繰り返されていた。ご苦労がしのばれる思いがした次第である。

(参考資料)

キリスト教関係メディア

・ *World Council of Churches* :

だった。「私は“Sisters in Islam”には同意できない。私は許容されたいのではなく、受容されたいのである」(ナイジェリアのカトリック John Onaiyekan 大司教)。「宗教間対話は、本委員会に相応しい主題ではない。共通の基盤からかけ離れている」(ルーマニア正教会 Rev. Viorel Ionita 教授)。

<http://www.wcc-coe.org>.

- ・ *Berita CCM (Council of Churches of Malaysia)*, Oct.-Dec.2003, pp.4-7 / April-June 2004, p.1, p.27.
- ・ *CCM (Council of Churches of Malaysia) Newslink*, August 2004 / September 2004.
- ・ *Catholic Asian News*, September 2004 (Vol.33 No.9), pp.24-26.
- ・ *Union of Catholic Asian News* (ML 6585.1300, 6 August 2004)
『世界キリスト教情報』(2004年8月9日/8月16日)
『クリスチャン新聞』(2004年9月12日) p.5.

国内メディア

- ・ *Bernama.com*.(3 August 2004)
- ・ *Berita Harian Online* (5 Ogos 2004)
- ・ *Harakahdaily* (4 August 2004)
- ・ *Malaysiakini.com*. (3 August 2004)
- ・ *The New Straits Times Online* (1 August 2004 / 5 August 2004)
- ・ *The Star Online* (22 July 2004 / 29 July 2004 / 4 August 2004 / 7 August 2004)
- ・ *Utusan Malaysia Online* (4 Ogos 2004(17 Jamadil Akhir 1425))

国外メディア

- ・ *The Straits Times* (Singapore) (4 August 2004 / 6 August 2004)
- ・ *Religion News Service* (USA) (19 July 2004)
- ・ *Taipei Times* (Taiwan) (4 August 2004)
- ・ *Ecumenical News International*

(Switzerland) (3 August 2004)

- ・ *News 24.com* (South Africa) (3 August 2004)

(追記)この原稿の推敲中(2004年9月16日)に、マレーシア教会協議会からニュースが届いた。WCC 信仰職制委員会の理事代理 Rev. Thomas F. Best から、アブドゥラ首相の出席と演説に対して、丁重な感謝状(日付は不明)が送られてきたという。筆者を含めて賛否両論さまざまな反応がある一方で、不安定な世界情勢の中、ともかくも安泰に幕を閉じることができたのは、大変喜ばしい。アブドゥラ首相が国内政治において、発言をどのように実践されていくのかなど、今後の動向が注目されるところである。

(2004年8月5日記 11月1日追加修正)